

〈実践報告〉

〈基礎作曲法〉～教職課程科目としての実践報告～

河 合 摂 子

大阪芸術大学音楽学科、演奏学科では、教員免許状取得科目として3年次の学生を対象に、「基礎和声法1」「基礎和声法2」を履修の後、「基礎作曲法」を通年の演習科目として開講している。「中、上級和声法の知識、技法を学び、その和声の知識を応用しながら作曲を経験することで音楽への理解を一層深める」(2023年度シラバスより)という内容に沿って複数クラスで授業を行っている。

この授業を担当する一人として、授業の内容、教職課程の必修科目としての意義、到達目標などをまとめることにより、今一度自分の授業の内容を見直し、自身の指導方針に役立てていきたい。

1. 教職課程科目としての「基礎作曲法」

○中学校の学習指導要領

・音楽の目標

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して(1)曲想と音楽の構造や背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解するとともに、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。(2)音楽表現を創意工夫することや、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができるようにする。(3)音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情を育むとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽に親しんでいく態度を養い、豊かな情操を培う。(一部抜粋)

○高等学校の学習指導要領

・音楽Iの目標

音楽の幅広い活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と幅広く関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。(1)曲想と音楽の構造や文化的・歴史的背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解するとともに、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。(2)自己のイメージをもって音楽表現を創意工夫することや、音楽を評価しながらよさや美しさを自ら味わって聴くことができるようにする。(3)主体的・協働的に音楽の幅広い活動に取り組み、生涯にわた

り音楽を愛好する心情を育むとともに、感性を高め、音楽文化に親しみ、音楽によって生活や社会を明るく豊かなものにしていく態度を養う。

・音楽Ⅱの目標

音楽の諸活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と深く関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。(1) 曲想と音楽の構造や文化的・歴史的背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解を深めるとともに、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。(2) 個性豊かに音楽表現を創意工夫することや、音楽を評価しながらよさや美しさを深く味わって聴くことができるようにする。(3) 主体的・協働的に音楽の諸活動に取り組み、生涯にわたり音楽を愛好する心情を育むとともに、感性を高め、音楽文化に親しみ、音楽によって生活や社会を明るく豊かなものにしていく態度を養う。

以上の目標に沿った教員を育成するために開講されている。

主に「基礎作曲法」は和声法、作曲という二つの柱で成り立っており、和声法では借用和音や、和音外音の理解、作曲では器楽作品、声楽作品を作曲することで、曲を自分自身で分析し、理解することで指導に活かし、自分の演奏にも客観的に説得力をもたせることに繋げる。

音楽の基礎科目の一つとしての最終段階にあたるこの科目が学生にとって、さらなる楽曲研究のための礎になり、後に指導者になったときの授業の後ろ盾になるよう願っている。

2. 授業内容 その1

①和声法

「基礎和声法1」「基礎和声法2」での機能と声法の基礎を踏まえ、前期では準固有和音、副属七の和音のバス課題、ソプラノ課題（和音外音を含む）を、後期ではバス課題の副属七の和音の続きと、転調の課題に取り組む。

機能と声法とは調性音楽に使われている音階音から作られる和音の連結を学ぶ学問で、音楽を専門的に学ぶものには必修科目である。

音楽の三大要素“旋律”“和声”“律動”の一つである「和声」は音楽を形成している音の様々な動きによって総体的な響き合いにできる音の集合体である。その和声を作っているそれぞれの音のパートの動き方や、その音の性質を知ることにより、必然的に音をまとめて認識でき、縦の響き、横の響きも理解できるようになる。その理解は音楽を作っている一連の音の関係性を捉える能力となり得る。

そしてこの和声法を学ぶことは読譜力、暗記力にも大きな影響を与える。一つ一つ音を読むのではなく、音と音との関連を意識的にできればその紡ぎだす音楽は構造が明確になり、その作品の根幹は授業、演奏等に大きく反映させることができる。その為にも和音の連結を様々な音の性質、連結の仕組み、和音設定、和声の抑揚、ソプラノ、バスの美しい流れ、等多くの制

限の中考え、作り出す演習の授業は音楽基礎科目として、音楽を学ぶ者には必須となっている。

実際に自分で繋いだ和声を演奏し、音にすることも大事な経験であり、それはもう一つの柱の作曲へ繋がっていく。作曲家がどのような考えを持ってこの響きを求めたか、少しでも作曲家の足跡をなぞることができる。音楽の向かう方向を決める一つの要素が和声であることを知ることができれば、それはディナーミク、抑揚、テンポ、緊張と弛緩のバランス等全てのことに関連性があり、その先への展望に繋がっていく。楽譜の読み解き方、演奏の仕方、指導の仕方等が変わり、そこまでに辿り着く過程を多く体験すればするほど様々な作曲家の足跡を知ろうと自分で勉強しようと思う意欲に繋がると信じている。

3. 授業内容 その2

②作品課題

これこそがこの「基礎作曲法」の最も重要な内容と理解している。

作曲を専門とする私にとって、様々な授業やレッスンを受けてきた学生に、全く逆の発想をさせて作品へ向かわせるということはとてもやりがいがある。楽譜を再現するのが演奏。一方、全く何もないところから、自分の内なる音や経験から生まれる音に耳を澄まし、楽譜に書き起こすのが作曲である。学生は、和声や形式、旋律などを理論に基づき構築し、作品に取り組む。この時の感動、感覚が間違いなく学生の専門実技や指導に活かされると思う。

この作品課題は、前期 器楽作品、後期 声楽作品と決まっているが、指導内容は担当教員に任されている。よって、ここでは私の授業内容を詳細に述べたいと思う。

最終ページに私の作品例を掲載する。

(1) 器楽作品

前期ではピアノと他の楽器によるデュオ作品を作曲する。学生は専攻楽器や、経験のある楽器を選択し、作品に取り組む。

初めて作品を書く学生が多いので、考慮すべき要点を指導する。

[形式]

まずは形式を提示する。あまり長い作品ではなく、創作しやすい二部形式、三部形式を中心に、小楽節、大楽節の説明、Aの部分、Bの部分のコントラスト、終止の説明などを行う。

[主題]

主題は、作品の顔であり、なるべく簡潔でいくつかの音楽的要素を持ちあわせたものとする。それを発展させて曲に展開していく。以下に実例をあげて説明する。

例





①旋律の動きを反行

②和音外音を使用、リズム変化



③順次進行を跳躍進行へ変化、同音連打の数の変化 ④休符を使用、リズムの変化

[和声]

機能和声の進行を考え、フレーズを大切にし終止も考える。Bの部分には出来るだけ単調にならないように副属七の和音等を使用し、その和声が色彩的な効果を生むことを感じ創作させる。

[ピアノ譜からデュオへ]

いきなり2つの楽器の為に書くのは難しいと考え、私はピアノ譜の作成を必ずさせる。

そこから2つの楽器の役割をいくつかの例を示して説明する。

例



①旋律と伴奏

②旋律と6度下や追奏、伴奏



③分散と、旋律、バス

④対旋律と、旋律、伴奏

[注意事項]

それぞれ選んだ楽器の音域や、特性をよく知ること、ピアノと楽器の音の距離（バランス）、フレーズのまとまり等を考えるよう指導する。

[記譜の注意点]

美しく、見やすい（演奏しやすい）楽譜を作成すること、なぜなら誰が演奏してもきちんと考えが伝わる楽譜を作曲家は書くことが重要であることを述べる。その為にはテンポ、表情、アーティキュレーション等最善のものを書き示すこと。

最後に私の作品例を提示し、音楽を聴き、それぞれの作曲に取り掛かる。その作品は本稿の最後に掲げる。

(2) 声楽作品

後期は声楽作品に取り組む。学生には4～5つの詩を提示し、その中から1つを選択し、混声合唱曲（無伴奏）を作曲する。基礎作曲法の本丸、機能和声の四声体をしっかり把握し、自然な和声感、歌いやすい旋律等に留意し、取り組む。

[詩をメロディーにする]

詩を何度も読ませる。そして言葉の高低を考えさせ、そこから拍子、調、等を考えるよう指示する。特に詩の起承転結や行間の意味を重視し、その世界観を大切にしよう指導する。

例

秋の音	詩 いたいせいいち
コツンとじめんにおちた 秋の 秋の音	ドングリの おと かわいい 音

あ き の あ き の か わ い い お と

[和声をつける]

作成した旋律に機能和声に基づいて和声をつける。音域や、和音外音も考慮し、副属七も積極的に使用し、詩の美しさを支える和声をつける。ピアノ譜で作成させる。

コツとじめんに おちな ドングリの おと
あきの あきの かわい おと

[四声体で作成]

機能と声法の規則に注意を払い、ピアノ譜での四声体を作成する。

コツとじめんに おちな ドングリの おと
あきの あきの かわい おと

[提出楽譜に清書]

作曲した作品を何度も歌い、歌いにくいところがないか確認する。速度、表情、アーティキュレーションなどを丁寧に書き入れる。最後に私の作品例を示し、全員で歌い、自作に取り掛かる。

4. 学生の習得について

このように基礎和声法と作品制作をもって、この「基礎作曲法」は基礎科目として、教職課程の科目としての集大成の授業となる。彼ら彼女らが指導者として歌唱、鑑賞、創作などを教えるとき、この授業で得た専門知識が和声感や作品の分析に生かされ、より深く作品を掘り下げることができるであろう。彼ら彼女らが、生徒に音楽を学ぶ意義や、体験を通して感性を豊かに育てることの大切さ、素晴らしさ、個性の尊重などを伝えていける大きな力になることを祈っている。

5. 「基礎作曲法」を学んだ学生の感想

この授業は概ね1クラス20人前後の学生が履修している。この度この実践報告を書くにあたり数名の学生に「基礎作曲法」受講の感想を寄せてもらった。以下に記載する。

○私自身は、基礎作曲の授業は和声とかさらに難しく大変でしたが、理解できれば楽しかったです。作曲は今までしたことがないので、手探りで難しかったけど、先生がたくさんサポートしてくれていたのが嫌ではなかったです。教育実習となると難しいのですが、教材研究などで役立っているかなと思います。創作の授業であればより基礎作曲の授業を活かせると思いますが、教育実習では歌唱のみでした。

○教育実習では、合唱曲を伴奏するときに短時間で練習だったので難しい部分は弾けませんが、作品を作った経験から、曲の和音進行を見て簡略化した伴奏を考え、弾くことができました。中学音楽と直接関わりのある授業ではないかもしれませんが、知識や経験として、指導や演奏に活かすことができましたと思います。個人的に、音楽理論は好きな分野だったので、難しさを感じつつ基礎和声法から進化した形で、とても充実した授業でした!!また教員のハツラツとした授業は常に明るく、また個人の進捗にも合わせて進めていただけたので落ち着いて授業を受けることができました。

○基礎作曲法では、1、2回生の頃に学ぶ基礎和声法の授業よりもさらに踏み込んだ和声法を学ぶことができ、とても勉強になりました。また、複雑な和声進行を使うことよりも、まず基本的な和声法を用いて作曲する方法を先生が親身になって教えてくれるので、実際に卒業制作の作品作りに活かすことができました。

○基礎作曲法では、これまでの基礎和声法などで学んだ知識をもとに、実際の作曲に直接応用しやすい和声の勉強をすることができて、和声の勉強をより作曲に結びつけることができるようになったと思います。現在作曲している中でも、基礎作曲法で学習した和声を用いることで作品に色彩感が出ていると感じています。担当教員は、和声が苦手だったり、作曲が苦手だったりする学生に対しても、とても親身になって教えてくださっていて、私自身も授業へ行くのが毎週楽しみでした。

○1、2年で習った和声のわからない部分や基礎的な所を学ぶことができました。私は和声を学ぶことで、レッスンの曲や教育実習で伴奏とかをするときに、活かせたと思います。構造がわかって曲に取り組むと、考え方が変わってくるので、大切だなと思いました。

6. おわりに

「基礎作曲法」を受講した学生の感想を読むと、私の授業内容を理解し、作品に取り組んでくれたように思う。また、彼ら彼女らが指導者になったとき、この授業内容が活かされることを望んでいる。私自身も自分の授業を振り返り、基礎作曲法が教職を目指す学生にとって重要であると再確認した。これからも、音楽への理解を一層深められるよう、信念をもって指導していきたい。

子供のワルツ violinとpianoのための

Andante

作曲 河合 摂子

Violin

mp

Piano

p

pizz.

mp

mf

mf

p

arco.

秋の音

詩 いたい せいいち
曲 河合 摂子

Andante
mp

Soprano
コツン とじめんに おちた ドングリの おと

Alto
mp
コツン とじめんに おちた ドングリの おと

Tenor
mp
コツン とじめんに おちた ドングリの おと

Bass
mp
コツン とじめんに おちた ドングリの おと

5 *f*
あきの あきの かわ いい お と

f
あきの あきの あきの あきの かわ いい お と

8 *f*
あきの あきの あきの かわ いい お と

f
あきの あきの あきの かわ いい お と